

2003

東広島市現代美術プログラム 白市 DNA

会期：2003年（平成15年）9月20日⇒10月13日

会場：東広島市高屋町白市

報告：伊東敏光



伊東敏光《大黒椀》2001
鉄、磁石、砂鉄 W48 × D48 × H40cm



長岡朋恵《エントロピー最大》2001
プラスチック、ソファ、CDプレイヤー

この展覧会は東広島市教育委員会主催の、高屋町白市のまち全体を会場とした現代美術展であった。広島市立大学からは彫刻専攻、デザイン工芸学科を中心に教員、大学院学生など13名が作家として参加した。

高屋町白市は、1503年に築城された白山城の城下町として成立し、今なお江戸初期以来の古い町並みや神社仏閣、戦国時代の遺跡が多く残る独特の景観を持つ地域であり、歴史を視覚で認識することの出来る数少ないまちである。

展覧会では、現在をまちができてからの500年間とこれから後の500年との丁度中間として、若手を中心とした現代造形作家の作品を街に展示することによって、この展覧会を白市の過去と未来をつなぐものと位置付けた。その際各作家は、白市の歴史や独特の文化を踏まえた上で、白市の市街空間を利用し、創作と展示をおこなうことをこころがけた。また観覧者には、地区内の公共施設等に置いてある地図をもとに街を自由に散策することにより、作品と共に白市のまちが持つ様々な魅力に触れる機会となるよう展示案内などを工夫した。

展覧会期間中はTV、新聞等に度々取り上げられたこともあり、予想をはるかに上回る5250名の来場者があった。来場者の年齢層は幅広くお年寄りや子供など普段はあまり美術に興味がない層の来場が多かったことが特徴としてあげられる。また運営にあたっては、住民を中心としたボランティアスタッフの存在が大きな力となり、会場案内、作品管理、展示解説等、管理運営面でも来場者から大変好評であった。

芸術展として特徴的であったのは、展示場所となった旧家や店舗、空き地などが、美術館のように何も無い無機質な空間ではなく、歴史が刻まれた生きた生活空間であることである。このような場所に作品を展示しようとするれば、当然場所との関係が無視出来ないものとなり、この「場」の存在が中継ぎとなり、作家と鑑賞者、さらにそこで生活する人々が共通の価値観を共有することが可能となった。それにより普段は非日常的な芸術が、日常的で生活に根ざしたものとして捉えることが出来たように思える。